



小林勇文集

第七卷

筑摩書房

小林勇文集 第七卷

一九八三年六月二十日 第一刷発行

著者 小林 勇

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

101 東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 ○三(二九一)七六五一営業部

○三(二九四)六七一一編集部

振替 東京六四一二三

印刷所 精興社 製本所 鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

冬青庵楽事

赤い鞆

詳細目次

解題

口絵・蟹

185 1

一九八〇年作

詳細目次

冬青庵衆事

煙・雲

画家長命

「雪は天から送られた手紙である」

死顔を写す

「銀座春雨」

春の雪

牡丹

雅号

画仙紙

どくだみの花

五葉兄弟

「仰臥漫録」再見

包む

75 68 60 58 51 47 38 33 29 19 16 11 3

眼力

枇杷

劉生の悩み(1)

劉生の悩み(2)

劉生の悩み(3)

白菜

ぐい呑み

戸隠の初冬

高見順と子規の絵

白足袋、民謡、民芸

板本のたのしさ

那須良輔、一平などのこと

手習い雑感

郭沫若の詩と書

後記

182 172 160 155 149 144 135 133 129 124 112 103 92 88 81

赤い鞆

ふるえる

蛇と龍

蛇

限定版図書館

岡田武松の子供図書館

酔筆についての走り書き

ほろびしものは美しきかな

木下李太郎「百花譜」について

一路堂

巻物

赤い鞆(1)

赤い鞆(2)

ユースゲ

民家

「二掃百態」

職人

あとがき

292 286 279 273 268 259 250 242 233 223 213 211 205 202 196 187

冬青庵樂事

煙・雲

一九七四年。今年は銀杏が黄葉して、そして散ったのは例年よりおそかった。毎年夏が終る頃、台風が来て、それまで無事に過した銀杏の枝をゆすぶり、厚めの葉を無惨にきずつけもぎ取ってしまうのだった。一度大風にやられると秋の美しい黄葉は見られない。私がここ鎌倉扇ヶ谷に住んでからすでに三十五年になるが、その間に、風に痛められなかったのは二、三回に止まる。

台風の来なかった年、銀杏は十一月の初めには揃って黄葉し数日後には散りはじめる。今年は半ばを過ぎてようやく黄金色に輝き、月の尽きる頃一度に散り出した。そして裸木となり、初冬の青空にすでに来年の芽のふくらみを持った枝を聳えさせている。

私の家の庭には三本の銀杏の木がある。ここへ移った時それらはまだ幹を両手でやすやすと抱えられる太さだった。三十年の歳月はこの木々を驚くばかり生長させた。枝の繁みに日光を奪われる私の家では、日の射さぬ陰鬱さに我慢出来ず再三枝を下した。しかし鎌倉はこの木が育つのに適した地と見えて忽ち勢力を盛り返すのだった。

今年は風害を免れた葉が一斉に黄色くなり、道を通る人々まで楽しめました後、或る夜半、目覚めると、屋根にあたる落葉のかすかな音がつついているのを聴いた。朝、雨戸をあけると庭は黄色の葉に

おおわれていた。

銀杏の葉は散っても水分を持っている。いきなり焚こうとしても駄目だ。私は毎年この落葉の始末だけは自分の受持ちとしている。三本の本の全部の葉が落ちて、乾くまで待ってられないので、少しずつ焼くことにしている。その一日の量は、寝る前にすっかり白い灰になる程度である。風のある日、やがて雨になる見通しの日はこの仕事は休む。晴れたおだやかな日の喜びは落葉を焚くために庭へ出ることだ。終日つききりになっていないわけではないが、なま乾きの葉を焼くためには、細かい心づかいと技術が必要である。その日の分量がすっかり燃えつきて、後に白い灰だけが残っている風情を私は愛する。

風もない空に、淡い煙がたちのぼり、消えてゆく。それを眺めながら私はいろいろの想いにふける。この頃は何をしてもすぐに絵のことに心が傾く。落葉を焚く煙の立ちのぼるのを見ていて、このような煙の容を描いた絵があるだろうかと思う。竹田の「船窓小戯帖」の中に小舟の中で章魚を煮ているらしく煙が上っている図がある。鍋の下から出る煙としては少し盛んすぎるように思われるが、しかしそのなびき方は生き生きとしている。探せばほかにも焚火をしている絵は見つかると思うが面倒なのでやめた。

私の焚火の色は白くて淡い。とりとめのない拡り方をして流れて消えてしまう。絵にするためには、やはり竹田のようにひとすじの空に立ちのぼる煙にしなくてはならないであろう。

同じ煙でも、火山の煙は、焚火の煙とくらべものにならぬ強い力をもっている。

今年の夏私は北軽井沢の浅間牧場へ毎日通って浅間山を眺めた。何枚もスケッチをした。そしてつ

くづくこの山の恐ろしさを知った。平凡な意味で忠実に写生しようとしても、絶えず変化している浅間は捉えようがなかった。山容こそ変らぬが、色は刻々に変化する。パステルで色づけしていると、限りのない仕事になり、やがて投げ出したいような心持になるのだった。また山を包む雲、山肌を這う雲の形は瞬時も静止していない。

頂上の右手からの噴煙の大きさも色も、どんどん変った。何か強烈なエネルギーを持っていることを感じた。

私は数日の浅間山との対面の結果この山の輪郭は描くことは出来るが、山の内に潜むもの、生きていくものは、いくら時間を費しても写生することは出来ないと思つた。よく眺めれば形は覚えることが出来る。しかしそれから先がひどくむずかしいのだ。それがわかつたのは山に向つていたおかげである。

梅原龍三郎画伯が、もう何年も浅間山を描きつづけている心持を幾分かは理解し得たような気がした。画伯は浅間山のかたちも、色も、噴煙も、山を包む雲も霧も知り尽していると思う。恐らく見なくても絵は出来るであらう。しかも画伯は軽井沢の別荘では毎日夜明けに起きて浅間が見えればすぐ仕事にかかるときいた。山に向つて仕事をされるということを私は心にとめなければならぬ。

画伯は、私のように、浅間の山肌と、その周囲の変化とを追っているのではなく、浅間山の持つてくる不思議な力を捉え、表現しているのだ。私は今さらに梅原画伯の幾つかの浅間山の作品を思い浮べた。浅間牧場の数日は、私の自然を見る眼を少しく深めるに役立ったように思う。

鎌倉に住んでいれば、雲をしみじみと見る機会は少い。海岸へ出て、水平線に接している雲を見ることは出来るが、それは信州あたりの山岳地帯で見る雲とちがう。山はあっても低いから、山腹を横切る雲など見ることはない。

南面の山水を見ると、雲をうまく使っているのに感心する場合が多い。しかしいくら雲を有利に、利口に使ったようでも、空々しいものもある。力量の不足はもちろんだが、やはり自然をよく見て、勉強していない故だろう。万巻の書を読み千里の旅を行かなくては画家になれないといわれるが、それは文人画家に多く求められることであろう。苦勞して旅をすれば、自然をいやでもよく味うことになる。しかも画家の目をもってすれば一層その効果は強いだろう。

雲一つのことを考えても、それを概念的に表現しては失敗するだろう。山に出て来る雲をよく見ていけば、優れた画人の山水に描かれている雲が、真物であることがわかるのである。画家に千里の旅をすすめたのは自然をよく見よと説いたのである。「千里の旅」を行った画家は、たとえ家の中で描いても、うそは生れないのであろう。

戦前、中央气象台にあって最も活躍した気象学者藤原咲平に「雲」という本がある。あらゆる雲を分類し、その雲の形と性質を写真によって説明したものだ。空に生じ変化し消えてゆく雲を、ぼんやり眺めて「雲」だと思っているのは呑気すぎるのである。さてその説明はここに私の出来ることではないからやめるが、藤原が、絵に表れた雲について話してくれたことがある。

昭和八、九年のことである。藤原は絵が好きなので、帝展などにもよく出かけたようだ。展覧会には風景画も多く出ていたと思う。藤原はそれらの絵に雲が描かれていると注意して見た。相当の数が



寺田寅彦筆 風景

あったらしいが、ほとんど全部雲の性質実態を掴んでいなかったという。科学者の藤原は、そのことが気になって仕方がない。雲の描かれている絵は、その観点から批評してしまうのであった。

藤原のような見方をすれば、たいていの絵は落第してしまうだろう。しかし私は藤原の考えもまた一理はあると思う。

藤原は、雲を最も正確に描く人として日本画家武井真澄を推賞した。この画家は山岳画家ともいうべき人で、毎年日本アルプスに一月くらい籠って写生をつづけた人だ。私が藤原に見せられたのは凡て、墨画であった。もちろん現場ではスケッチだけで、東京で画仙紙を使って描いたのだ。濃い墨と渴筆を多く使って、高山の鋭い容や樹木を描こうとしていた。そして高山特有の雲が捉えられていた。真澄は貧乏をしていたらしい。藤原から依頼されて、私は数枚あづかった。誰に買って貰う当もないので寺田寅彦のところへ持っていっ

た。寅彦は苦い顔をして話をきいていたが、ぼくは自分が気に入らなければ、誰にたのまれても、絵は買わないよ、といった。そして巻かれている絵を開いて見て、何もいわずにすぐ巻いてしまった。

私が通された応接間の、寺田の腰かけている背後には、高村光太郎の花の絵がかかっていた。

寺田寅彦は、絵を描いた。水墨も描いたが油彩が多い。寅彦の風景の一枚に、汽車の駅を描いたのがある。たしか大宮駅ときいたが、大正時代の大宮駅は今と甚しいちがいだ、寒駅の姿だ。この絵は夕方近い頃らしく、重く垂れ下った雲の空の下に向う側のプラットホームと近くに煙を吐いている貨車とホームにつまれた貨物が描かれている。寅彦は藤原咲平の先生である。藤原がこの絵に描かれた雲を見たら、何といったであろうか。

山水画に描かれる雲は、遠近距離高低を現すのに都合のよいように使われている。私が今卒然と考えたのでは、雲を割合に多く描いている画家は、石濤である。書棚を探して見ると「石濤老人杜陵詩意图」という画冊が見つかった。山水十二図をもって構成されているこの画冊のうち十図は雲が描かれているのである。

白雲は山を巻き、入江を無限の遠さに導き舟や人を孤独の世界に置く。石濤の山水のあるものやわらかさ温かさは、雲に助けられているように私は考えるのである。

絵の中の雲に学問上の正確さを求める必要はないと思うが、雲はこういうものと概念的に考えて表現するのはよろしくないだろう。しかし雲も煙も霧も流動的であるからその実体を掴むことはなかなかむずかしい。結局そういうものを、忠実に数多く見、写生し、心の中へはっきり焼きつけておくよりほか仕方がないだろう。



石濤筆 杜陵詩意圖のうち

そんなことを考える時私は、まだ写真や映画などの出来なかった時代、鳥の飛ぶ姿や、動物の馳ける形を正確に観察し表現した画家の眼を偉いものだと感じるのである。

庭で朝焚き初めた銀杏の葉は燃え尽きようとしている。淡い煙が夕陽の中にかすかに動いている。私の家は、冬青庵と称しているが、実は庭の隅の方にある離れの名前なのである。昭和十五年十六年にこの家は建てられた。その頃は建築制限があつて、わずか三十坪しか許可しないという。百姓家の古材を使って建てたのであるにかかわらず制限があつたのだ。離れの茶室は、買った時地所についていたものである。若しそれを差引かれると、新しく建てられる分は二十坪ほどになってしまう。やむを得ず私はずるいことを考えた。

その離れは、小林のものではない。露伴のも

ので、少し手を入れて、やがて住むのだと、警察の建築係官に話した。彼はにやにやして聞いていて、本当でしようなといって、その離れは、新しい家と関係のないものと認めてくれた。勿論幸田文さんの諒解は得てあった。

新しく建てた家が出来たのち、離れに手を加えて、独立して暮せる家にした。その建築届は、幸田成行の名でやった。

昭和十七年の春、離れが出来上った時警察の係官がやって来て、また、本当に露伴先生はおいでになるのですかといった。

七月になって、暑い日がつづいた。露伴は女中を連れてやって来た。そして二十日足らずここで暮した。

露伴はこの茶室で、本を読んだり、私の子供達を相手にして過した。私も東京から早くかえった日は遊びに行った。

私は露伴に茶室に名をつけてくれるように頼んだ。露伴は一晚の後に、「冬青庵」としたらよからうといってくれた。音だけきくと芭蕉桃青のようだが、冬青はモチの木のことだ。お前の家にはモチの木が何本もあるから、こうつけたのだといった。数えて見ると庭にはモチの木が九本ある。露伴が冬青庵と命名した時からすでに三十余年が過ぎた。モチの木は枯れることもなく青々としている。

露伴家へ、鎌倉の市役所から、家屋税の通知が行った。露伴は怪訝な顔をして俺は鎌倉に家などない筈だがねといったという。文さんが急いでその通知書を取り上げて、私の方へ廻して寄越した。露伴は私のやったことを察したにちがいないが、何もいわなかった。

私が絵を描き出したのは、その頃で、迷わずに「冬青」を号として用いた。露伴は自ら絵は描かなかった。しかし絵には関心はあった。私は露伴がいった言葉の幾つかを今も覚えてゐる。

画家長命

午後になって少し暖かになった。大形のスケッチブックを持って家を出た。今日は朝寒かった故か街に人が少い。寿福寺の横に出て、墓地の端を通り、いつものように源氏山への道をのぼって行った。この道は十年くらい前までは、ほとんど人が通らなかつたので、両側から灌木と草におおわれていて、如何にも山の小径らしい風情があつた。鎌倉へ人がたくさん遊びに来るようになり、ここも次第に賑かになった。その上鎌倉市ではこの一帯を公園に指定し、その整備に失業対策を結びつけた。毎日二十人くらいの老人たちがのろろと働いている。大した仕事はないので、山の樹の間に生えている野の草をむしり取ってしまった。山の斜面は土が露出し、昔の道はなくなつて、少し烈しい雨が降るとすぐに川が出来る。

私はこのコースを好んで散歩するが、来るたびに、その荒廃を嘆き憤ることになる。

しかし今日は以前からねらっていたところから、山と谷と人家と遠い海の見える景色を写生しよう